みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

The History of Japanese Christian Churches and the Consciousness of Japanese Christians in Sacramento, California, U.S.A.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中牧, 弘允 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004462

日系キリスト教会の展開と日系キリスト教徒の意識

——カリフォルニア州サクラメントの事例——

中　牧　弘　允

The History of Japanese Christian Churches and the Consciousness of Japanese Christians in Sacramento, California, U. S. A.

Hirochika NAKAMAKI

This paper deals with two major subjects. The first is a report on the formation and development of five Japanese Christian churches: Japanese United Methodist Church, Parkview Presbyterian Church, First Japanese Baptist Church, Meyhew Community Baptist Church, and Japanese Seventh-Day Adventist Church. The second is an examination of the religious and ethnic consciousness and reasons for conversion of both *issei* (first generation) and *nisei* (second generation) Japanese Christians.

The first discussion focuses on the function of Christian churches among *issei* Japanese and Japanese Americans. The second presents data concerning their religious and ethnic consciousness of family, church and social life.

はじめに
Ⅰ. 日系キリスト教会の展開
1. 概況
2. メソヂスト
1) サクラメント日本人美以教会
2) フローリン日本人美以教会
3. プレスビテリアン
4. バプテスト
1) 第一日本人浸礼教会
2) メイユー・コミュニティ浸礼教会
5. セブンスデー・アドベンチスト
6. 整理と補足
Ⅱ. 日系キリスト教徒の意識
1. 入信動機
1) 一世の場合
2) 二世の場合
2. 宗教意識
1) 社会生活における宗教意識
2) 教会生活における宗教意識
3) 家庭生活における宗教意識
4) 個人と宗教意識
3. 民族意識
1) 民族教会としてのキリスト教会
2) 日系キリスト教界の民族的活動
3) 結婚と民族性
おわりに

はじめに

本稿はサクラメントに存在する5つの日系キリスト教会を中心に，その歴史的展開と，そこに所属する日系キリスト教徒の宗教的・民族的意識を検討しようとするものである[1)]。前半の第Ⅰ部は，教会の成立と展開にかかわる制度的側面に重点を置き，後半の第Ⅱ部では，信者の側からの意識やアイデンティティの問題を中心に据える。かつて本研究報告において，ハワイの日系霊能者をとりあげ，アメリカ的生活を送る日系人においてもなお強く日本的な民間信仰が継承されている問題を論じたが [中牧 1980]，今回はサクラメントの日系キリスト教徒をとりあげ，アメリカの社会や生活様式に最も同化したと思われる者においてすらなお尾をひく宗教的・民族的意識の問題をとりあげようと思う。ここに共通する研究の意図は，日本的な宗教伝統がどう継承されているか，また新しい意識にもとづく日系人固有の宗教伝統がどう形成されているか，ということである。

いうまでもなくアメリカ本土においてはカリフォルニア州といえども日系人は少数集団である。しかも黄禍論から強制収容にいたる厳しい排斥を受けた過去もある。たとえばカリフォルニア州をはじめとする西部諸州の日系人は，第2次大戦中の大部分を，強制移住させられた戦時収容所ですごした。そして戦後再び戻ってきて初めからやり直した歴史をもっている。こうした体験はハワイの日系人とは随分異なっていた。ハワイでは日系人は多数派を占め，陰に陽に差別はあったものの，戦時中も一部の指導的立場の人だけが強制収容されたにすぎない。この集団編成の相違がハワイと本土の日系人の問題を解く重要な鍵のひとつである。

さて，こと日系人の宗教生活に関する限り，カリフォルニア州のみならず研究はあまり進んでいない。教団の出版物は多いが，研究に値するものは限られてくる。それでも仏教に関する研究には幾つか注目すべきものもあるが [Kashima 1977; Layman 1976]，キリスト教に関してはさびしい状態である [Suzuki 1979]。筆者はアメリカ全体の動向を十分に把握しきってはいないが，サクラメントの事例研究を通して，日系人でもどちらかといえばマイノリティのキリスト教徒の宗教生活と宗教意識について報告しようと思う[2)]。

周知の如くサクラメントはカリフォルニア州の州都であり，州関係の諸機構が集中

1) 文部省科学研究費海外学術調査（研究課題「北米西海岸地域における日系人の宗教に関する調査」，研究代表者：柳川啓一）の補助金により，1981年7月～9月に現地調査を実施した。
2) 別府論文は，サクラメント周辺地域の日系人社会をとりあげ，仏教会とキリスト教会に焦点をあてて比較研究を行なっている [Befu 1965]。

する政治都市である。サクラメントは19世紀中葉のゴールド・ラッシュの時代に急速に繁栄し，1854年に州都が設置された。このサクラメントは市部と郡部にわかれる。1980年のセンサスによると，サクラメント市の人口は27万5741人であり，サクラメント郡の人口は76万2680人である。日本人は19世紀の末から続々とここに流れこんだ。中国人にかわる肉体労働者として鉄道工事や鉱山や農園の労働に従事したのである。もっとも，ゴールド・ヒルの近くに若松コロニーが明治初年に形成され，それ自体は失敗に帰したが，これは日本人がアメリカ本土で最初に試みた開拓としてよく知られている。1980年のセンサスで現在入手した統計からは日系人の数は不明であるが，1975年のセンサスによると次の如くである。サクラメント市には6201人 (2.4%)，サクラメント郡には8921人 (1.3%) 居住している。1975年から1980年の5年間にサクラメント郡の人口は約8万人増加しているので，サクラメント郡の日系人の人口は現在およそ1万人弱と推定される。

Ⅰ．日系キリスト教会の展開

1. 概　　況

サクラメントには現在5つの日系キリスト教会が存在する。市街にあるのはプレスビテリアンのパークビュー長老教会 (Parkview Presbyterian Church, 略して PPC) ただひとつである。残りはすべてやや郊外の住宅地域にある。それらはサクラメント日本人合同メソヂスト教会 (Japanese United Methodist Church of Sacramento, 略して UMC), バプテスト系の第一日本人浸礼教会 (First Japanese Baptist Church, 略して JBC), メイユー・コミュニティ・浸礼教会 (Meyhew Community Baptist Church, 略して MBC), そして日本人セブンスデー・アドベンチスト教会 (Japanese Seventh-Day Adventist Church, 略して SDA) である。もっとも，MBC は日系人の民族教会 (ethnic church) ではないが，そもそも民族教会として発足し，今でも教会員の大多数は日系人であるので，いちおう日系教会に加えておく。

サクラメントの周辺地域にはこのほか3つの日系キリスト教会がある。それらは Calvary Presbyterian Church (Stockton), First United Methodist Church (Loomis), Japanese United Methodist Church (Walnut Grove) である。ただしまだ実態調査をしてないので，本稿ではサクラメントの上記5教会に絞って論述する。

これら5教会は4宗派にわかれ，バプテストのみ2教会を数えるが，他はそれぞれ1教会のみである。もっともメソヂストでも合同教会の設立までは2つの教会が存在

していた。教会に正規に所属している日系人の信徒は1000名程度であろう。内訳はUMCが430～450名，PPCが約230名，JBCが約80名，MBCが約130名，SDAが約100名である。日系教会以外のキリスト教会への所属状況は，調査の現段階では全く不明である。ちなみにサクラメントの仏教会に繋がるメンバーは約1300名であるが，これには子供などは含まれない。ある牧師の推定では，日系人の50～60%が仏教会で，10～15%がキリスト教会に繋がり，残りは特に所属が明確でないという。ハワイほどではないにしろ複数帰属も考慮しなければならず，宗教別人口の割合を確かめるすべは今のところこれ以上には出ない。

さて，日系キリスト教会の歴史は19世紀末に遡る。いちばん最初に創設されたのはサクラメント日本人美以教会 (Japanese Methodist Church of Sacramento) である。ついで1915年にフローリン日本人美以教会 (Florin Japanese Methodist Church) が創設され，1920年にサクラメント日本人基督教会 (Japanese Church of Christ of Sacramento) と第一日本人浸礼教会が相次いで設立された。その後，メイユーにできた第一日本人浸礼教会の伝道館がメイユー・コミュニティ・バプテスト教会に発展した。いちばん新しいのが日本人セブンスデー・アドベンチスト教会である。そこでここでは宗派別に古いほうから，メソヂスト，プレスビテリアン，バプテスト，セブンスデー・アドベンチストの順序で記述し，最後に整理と補足を加える。

2. メソヂスト

現在のサクラメント日本人合同メソヂスト教会は，1968年にサクラメントのパイオニア・メソヂスト教会とフローリンの日本人メソヂスト教会が合同してできた教会である。その歴史は19世紀の末まで遡る。そこでまずパイオニア・メソヂスト教会の前身であるサクラメント日本人美以教会について述べ，つぎにフローリン日本人美以教会の歴史に移ることにしたい。なお美以教会とはメソヂスト＝エピスコパル教会の日本語訳であり，今ではエピスコパルが消えメソヂストのみとなっている。

1) サクラメント日本人美以教会[3)]

サクラメント（桜府）日本人美以教会は，1892年サンフランシスコ（桑港）美以教会の支会として510 L St. に創設されたが，前年からサンフランシスコより伝道者たちが路傍伝道や伝道会に赴いていた。初代の牧師は木原外七である。正式にはハリス監督 (Dr. M.C. Harris) のもとに1893年に教会設立となった。教会は市街のなかで転

3) インタビューに加え，内部資料の「サクラメント日本人美以教会の略史」(1954) を主に参照した。関連の記載は [藤賀　1936: 160–164] [白石　1964: 96–97] [Koga　1977: 147–149]。

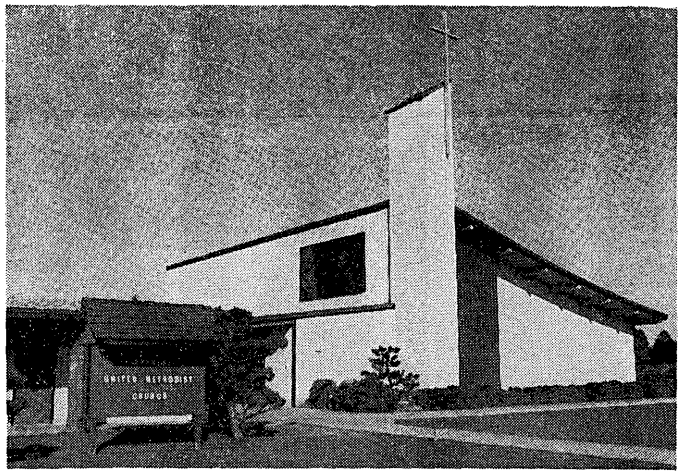


写真 1　サクラメント日本人合同メソヂスト教会

々とその場所を移動した。教会といってもふつうの家屋を借りたもので，牧師館を兼用していた。教会活動の中心は伝道と礼拝と日曜学校だったが，英語学校や寄宿舎を経営したこともあった。1903年にはハリス監督を招聘しフローリンで伝道集会を開いている。また1915年頃より青年が多く集まり，演説会や討論会を活発に行なった。彼らの多くは農家や商店の下働きや，ハウスウォークやスクールボーイと称する家庭働きにでていた。1915年には最初の家庭集会も開かれている。牧師は頻繁に交代し，戦前まで20名余りがつとめた。短い者で半年，最長が2期で計10年である。

1935年頃には，一般礼拝にでる二世が増加し，会堂の狭隘を感じて新築の議が起こったこともある。しかし日米開戦で強制収容となり，大半の信徒が全米各地に転住した。しかし，わずかの帰還者達は教会の復興に努力した。とくに教会をホステルとして一般に開放し，帰還者の便宜をはかったことは特記に値する。そして1951年には新会堂を完成させ，献堂式を行ない，翌年には創立60周年記念伝道集会を1週間にわたって実施した。パイオニア・メソヂスト教会 (Pioneer Japanese Methodist Church) と改名したのは戦後のことである。1968年にフローリンの美以教会と合併したが，合同前は礼拝に14～15人，婦人会も毎週5～10人が集まる程度の小さな教会となり，経済的にも苦しくなって合同に踏みきったという。

2)　フローリン日本人美以教会[4)]

フローリンの日本人美以教会は1913年津田彌三郎が日本語学校と日曜学校を開校し

4) インタビューに加え，内部資料の「フローリン日本人メソヂスト教会略史　1913年-1968年」(1968) を主に参照した。関連の記載は [藤賀　1936: 183–189] [白石　1964: 107] [KOGA 1977: 147–149] などにある。

たのに始まる。もっともフローリンへの伝道はそれ以前よりなされていた。先述の如く，1903年，ハリス監督を招聘し，白人の美以教会を借りて伝道集会を開催したところ，立錐の余地なきほど会堂に日本人があふれたという。1915年，真鍋頼一牧師（のちに青山学院の理事長）を招聘して教会を発足させた。津田彌三郎は日本語学校教師を続け，後に神学校に入学した。1918年，フローリンに近接し大正時代に拓かれた大正区でも日本語学校と日曜学校が始まった。

1920年，幼稚園が開設され，1921年には婦人会会員が50名を突破した。1927年にはホールが新築落成し，スポーツや祝賀会などに利用された。大恐慌後の1930年代には，財政難の教会の経費をまかなうために映画会が年3～4回行なわれたという。

特記すべきはリバイバルである。1930年代初期[5]，ロサンゼルスの伝道者馬場小三郎の特別伝道によってリバイバルがおこり，わずか半年の間に62名の受洗者があった。また40余名に対する神癒もあったという。大恐慌の後の不況のあおりを受け，生活の苦しかった人々が安心を得たことが，リバイバルの高揚の一大要因だった。この間，全村の戸別訪問もなされている。

1941年，25周年礼拝と伝道会が行なわれたが，同年の暮に勃発した戦争により，西海岸の他の日系人と同じ運命をたどった。

戦後，1945年5月，津田牧師が帰還し，7月から家庭集会を開始した。また WRA (War Relocation Authority) よりベット20脚・ブランケット90枚を借り，教会ホールをホステルとして活用した。二世時代が到来し，二世のための牧師が1年間在任したこともあった。また1955年からはタホ湖での二世修養会が始まり，10年間続いた。

1948年には創立35周年祝賀会を開き，1958年には創立45周年，1963年には50周年の記念行事を開催した。しかしこうした記念行事と平行して，教会の合同が論議されるようになった。まず戦後まもなくフローリンの白人メソヂスト教会との合同が詮議されたが，実現には至らなかった。ついで1959年にはパイオニア教会との合同を画策し，寄付をつのったが，失敗に帰した。その代りその資金をもとにして，1962年には，牧師館の新築落成をみた。ともかく時代の趨勢は教会の合同に傾き，1967年，パイオニア教会との合同案を可決し，かくして1968年6月16日，創立55周年祝賀会と同時にフローリン日本人美以教会の解散式を挙行した。なお解散式は牧師の送別会もかねており，合同と同時に榊原ジョセフ牧師が就任し，現在に至っている。

両教会の合同は比較的スムースに行なわれた。新設の日本人合同メソヂスト教会は，

5) 教会略史では1931～2年にかけて記載されているが，1934～5年にかけて興ったというひともいる。後者の立場を裏づける証拠は，1934年12月2日の日付のはいった記念写真が存在することである。

好都合なことに南サクラメントのMerwin Memorial United Methodist Churchから建物と土地の寄付を受け，そこに移転することができた。しかもその前に合同教会用の土地購入も終り，10万ドルの募金も成功していたので，それをもとにして1970年には礼拝堂とホールを新築落成した。

3. プレスビテリアン[6)]

パークビュー長老教会はそもそも桜府日本人基督教会として1920年に組織された。当時の教会員は28名であった。原田友太が牧師をつとめたが，臨時の牧師であった。したがって最初の礼拝が開かれた時，説教をしたのは原田牧師ではなく，太平洋沿岸日本人長老教会伝道総理のストウジ博士 (Dr. E. A. Sturge) であった。このストウジ総理は桜府日本人基督教会の生みの親とも言うべき人であった。総理はサンフランシスコで長老教会の日本人ミッションを担当しており，日本人の弟子を各地に派遣して布教活動を推進していた。その一つがサクラメントの日本人ミッションである。これは1913年に始まり，1913年から1917年までは中村順三が，1918年から1919年までは村岡菊三郎が牧師だったが，彼らは牧師といっても責任者に近い役割を果していた。この教会は市街の三番街で賭博場と売春宿の間にはさまれており，牧師は礼拝や集会に加え，季節労働者としてたむろしていた多くの若い一世に対し，さまざまな世話をしていたのである。

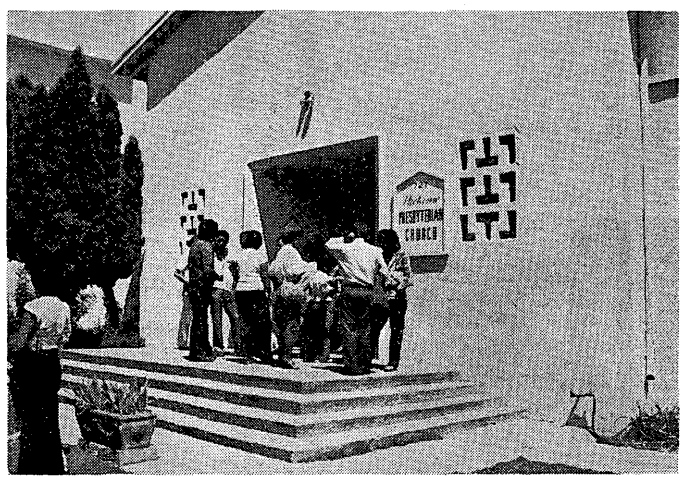


写真 2　パークビュー長老教会（日曜礼拝の後で）

6) インタビューに加え，内部資料の "History of Parkview Presbyterian Church" を主に参照した。関連の記載は [藤賀　1936: 189–194] [白石　1964: 111] [Koga　1977: 163–164] などにある。

ところで，1920年2月に発足した桜府日本人基督教会は，まもなく教会員の集団的離脱という危機に見まわれた。同年11月，土方揆一牧師自ら9名の教会員をつれて辞職したのである。主として信仰上の理由からだと推定されるが，彼らはバプテスト教会の有力教会員となったのである。

1921年6月，日曜学校が校長のもとに組織され，最初の記録では生徒135名，平均出席者100名であった。7人の教師が従事し6つのクラスがあった。ちなみに大人の礼拝をみると，1926年の日曜礼拝の出席者は平均25名である。そしてこの年の受洗者は大人7名，子供7名であった。

牧師はこの頃頻繁にかわっている。渡辺玉作(1920-1922)，小北皎次郎(1923-1926)，菊地寛治 (1926)，芦名武雄 (1926-1932)，渡辺連平 (1932-1937) と続き，1940年に中村勇が就任し，強制収容までその任にあった。この間，臨時牧師も何人か交代した。

日米対戦に至るまでの特筆すべき事項には次のようなものがある。最初の恒例ピクニックが1933年に行なわれた。1935年には教会で最初の映画会が開かれた。1936年から家庭集会が始まった。また同年，英語で礼拝をする二世中心のジュニア・チャーチが始まった。そして開戦直前の1941年5月，現在地に教会を建て献堂式を行なった。

日米開戦から強制収容に至るまで教会でもいろいろの出来事があったが，とくに長老教会本部から強制収容の可能性，またそれにどう対処するかといった指示が次々に下っているのが興味深い。

強制収容所では信仰の自由は認められ，キリスト教徒はエキュメニカルな礼拝を行なうことができた。中村牧師はコロラド州アマチ強制収容所にいたが，1945年3月サクラメントに戻り，隣のカトリック教会から返還された教会をホステルとして使用しながら，牧会活動を始めた。一時はサクラメントに帰還した日系人家族を7～8家族も収容した。ホステルはほとんどの日系人がそれぞれの落着き先に戻ったところで，1946年に閉鎖された。

1946年5月10日，教会の将来にかかわる重要な会議が開かれ，次のようなコメントがなされた。

1) 二世はアメリカ人の教会に加入することが望ましいが，サクラメントのような日系人コミュニティのあるところでは不可能である。
2) 若い二世は限られているので，日系人は三つの異宗派のキリスト教会よりも一つの超宗派的な教会をもつのが望ましい。

当時，民族教会を解散し白人教会に統合すべきだという教会本部の意向は，実際問題として通用しなかった。これには第Ⅱ部で後述するような面白いエピソードがある。

1947年5月16日，教会名をパークビュー長老教会と改名した。同年11月，中村牧師が離任し，1948年10月，甲賀純男牧師が着任した。この頃の特記すべき事には，次のようなものがある。1946年にボーイ・スカウトが結成された。1949年，ジュニア婦人会が組織された。そして1947年から月約献金が始まった。

甲賀牧師は1953年に離任し，1955年に加藤ポール牧師が就任し1967年まで勤めた。そして同年に財部平八郎牧師が着任し，1982年まで担当した。

財部牧師の着任後，日系人の教会として存続すべきかどうかをめぐって教会はゆれたが，現在のところは日系人教会として安定している。この間の活動として注目すべきは，一世のライフ・ヒストリーをまとめるプロジェクトの推進，他のアジア系少数民族との民族的連帯があげられる。これらの詳細については，第Ⅱ部にゆずる。

4. バプテスト

1) 第一日本人浸礼教会[7)]

サクラメントの第一日本人浸礼教会はその前身を聖書学院といった。聖書学院は1920年11月に創設され，5th St. と P St. の角に位置していた。創設メンバーは7人で，長老教会から離脱した土方揆一牧師が中心であった。日曜学校もその翌月から始まった。



写真 3　第一日本人浸礼教会（日曜礼拝の後で）

7) インタビューに加え，内部資料の「創立60周年祝賀会　60 Years of Ministry 1920–1980」(1980) を主に参照した。関連の記載は [藤賀　1936: 195–199] [白石　1964: 112] [Koga 1977: 140–141] などにある。

1922年，聖書学院を改め第一日本人浸礼教会とした。その頃，幼稚園や婦人会も始まり，牧師婦人がそれらの中核となっていた。また支部の創設も活発で，カメリア・ミッションをはじめ，メイユーやウッドランドにも伝道の拠点をもった。1926年，正式に第一日本人浸礼教会を名のった。

1932年7月，会堂修築記念の献堂式が行なわれた。この時の教会員は96名を数え，日曜学校生徒が126名，Baptist Young People Union のメンバーが25名を数えた。幼稚園児は21～42名であった。

日米開戦に至るまで，第一日本人浸礼教会は1932年に建てられた隣りのクリスチャン・センターと緊密なる提携をもって，日本人社会でいろいろな活動をしていた。このクリスチャン・センターはバプテスト・ミッションの経営するもので，バスケット・ボールなど各種スポーツ活動をはじめ集会などに利用されていた。バプテスト・ミッションの国内宣教師が日系人や中国人などの移民に対し，積極的な布教活動を行なっていた時期である。

1942年，日系人の強制収容に伴ない，教会は閉鎖され，クリスチャン・センターはリンカーン・センターと改名し，地域活動を重点的に行なうようになった。

1945年，日系人は再び西海岸に戻ってくるようになり，五十嵐謙三郎牧師はもとの教会をホステルとして活用し，100家族以上の世話をした。また五十嵐牧師はリンカーン・センターで日系人の礼拝を担当した。なお英語礼拝はリンカーン・センターのスタッフが担当した。

1954年，五十嵐牧師の引退に伴ない石原ロイ牧師が就任した。そしてキリスト教の根本が強調されるようになった。この頃，日曜学校や日曜礼拝の出席率が上昇し，二世の活躍が目立ってきた。

しかしサクラメント市街の再開発計画のため，教会建物のリンカーン・センターは売却され，新しい教会の必要性が生じた。そこでとりあえず1958年に市街の貸ビルの一角に教会を移し，ようやく1962年になって，現在の教会堂を Fruitridge Baptist Church から購入して移転した。なお，石原牧師はリンカーン・センターからの立ちのきの直前に離任し，ハワイの教会に移った。

1960年代後半は二世の婦人会が大いに活躍した。そして野球やバスケットなど青年のスポーツ活動が活発に行なわれ，サクラメントの日系人教会リーグなどで，男女ともチームを組んで競いあった。

石原牧師以後，何人かの牧師が交代して今日に至っている。日本人も日系二世もいれば，日本帰りの宣教師もいたが，皆日本語と英語を話した。だが，調査当時の臨時

牧師であった日系三世の瀬戸マイク牧師は，日本語を全く使わなかった。

現在の教会は二世が中心とはいえ，極端に活動メンバーが減少し，三世・四世もあまり活発ではない。一世・二世の教会員にとってはそれが深刻な悩みのようである。

2)　メイユー・コミュニティ浸礼教会[8)]

メイユー・バプテスト教会はサクラメントの東方に位置し，メイユー・コミュニティのバプテスト教会として機能している。したがって日系人のみならず，白人や黒人との混合形態をとっており，最初に述べたようにいまや日系人教会とはいいがたいが，そもそも日本人が建てた教会であり，今でも日系人が教会員の約7割近くを占めているので，とりあげることにしたい。

1927年，サクラメントのオーク・パーク（35th Ave. と Broadway の南のほう）のカメリア伝道館のメンバーだった日本人キリスト教徒が，メイユーに土地を買って移り住んだ。そこで彼らはあいはかり，家庭集会を始めたのである。それは日本語学校に日曜学校を加えたもので，土曜日に牧師が学校を開き，月一度日曜日の夕方に礼拝を行なった。そこで集まった献金は本部に送り，本部から逆に宣教師の給料が支給されていた。そして1930年には一室のみの日曜学校用の建物（community house としても機能した）を地元日本人の全面的協力をえて完成させた。1935年までは村岡菊三郎牧師が来ていたが，同年に70才になったのを機に引退し，代って当時聖書販売のコルポターをしていた五十嵐謙三郎牧師がバプテスト国内伝道会（Baptist Home



写真 4　メイユー・コミュニティ浸礼教会（日曜礼拝の後で）

8) インタビューに加え，関連の記載を参照した［藤賀　1936: 199–202］［白石　1964: 115］［KOGA　1977: 157–158］。

Mission Society) から派遣されて，カメリア，ウッドランド，モデスト，デイビスとともにメイユーの牧会に当った。

終戦後，メイユーの日本人はたいがい戻ってきたが，彼らの帰還の直前に教会建物は焼失した。そこでしかたなく家庭を提供した家において，1945年5月頃から日曜学校と礼拝を始めたのである。フローリンの津田牧師を2～3度よんだこともあるそうだ。そして1947年には教会堂を建て，サクラメントの第一日本人バプテスト教会の五十嵐牧師を招き，彼は1954年まで兼牧した。他方，二世集会と日曜学校のほうはリンカーン・クリスチャン・センターのクローン宣教師 (Miss Mary Opal Crone) が16年間 (1947～63) 協力の手をさしのべた。

そして1952年4月，メイユー日本伝道館 (Meyhew Japanese Mission) はメイユー・コミュニティ・バプテスト教会と改名し，多民族教会として歩みはじめた。そして1956年4月，現在の礼拝堂が完成し献堂式を行なった。古い礼拝堂は後日 Crone Hall と名付けられた。1954年3月からの牧師は第一日本人バプテスト教会と兼務で二世の石原ロイが就任し，この頃経済的に独立した。1957年11月に石原牧師は離任し，以降ずっと白人の牧師が交代で就任している。1961年10月に Scudder Hall の献堂式を行なったが，これは日曜学校用に使用する建物であり，最初の白人教会員の名をとった。他方，同じ日曜学校用の一世ホールは1969年5月に献堂式を行なった。現在の民族別教会員構成は，およそ日系人65%，白人25%，黒人10%である。そして黒人教会員の増加が問題として浮上している。

5. セブンスデー・アドベンチスト

1938～9年頃，一世の今井清吉牧師が数名の一世を相手に聖書研究をしていた。すでにその頃，白人の SDA 教会で受洗した日系人が存在した。

戦後，1952年頃，ハワイ生れの二世で神学校をでたての河野ハロルドがオーク・パーク界隈で家庭集会や伝道会をしていた。建物の上は白人，下は日系人の集会所として使用されていた。その頃，SDA のロマリンダ医学校を卒業してサクラメントに引越してきた者や，ハワイから移住してきた者があり，教会の中心的会員となっていった。

1964年，現在の教会堂をサクラメントの南の住宅地域に建立した。ついで1966年頃，日曜学校などに使用する建物が完成した。

牧師はハワイ生れの二世の堀之内勲がカリフォルニア大学デイビス校に通いながら2～3年つとめ，その後沖縄出身の新垣繁信が1972年までつとめた。同年ハワイから二世の瀬分ロイド牧師が赴任し，現在に至っている。

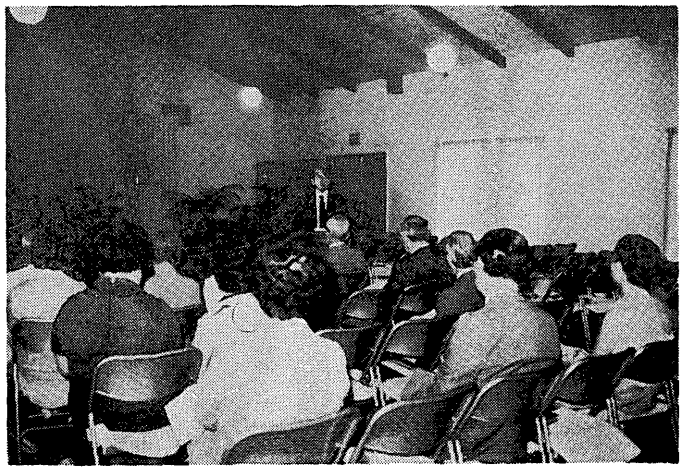


写真 5　日本人セブンスデー・アドベンチスト教会（日語部の礼拝）

現在の教会員の構成では教会設立当時の信徒がいちばん多い。そして沖縄系の教会員が他教会と比べるとやや多い。以前韓国系の教会員も合流していたが，現在では白人系の SDA 教会に属しているそうだ。白人の入会も時々あるというが，教会員として長続きはしないようである。

6. 整理と補足

これまでごく簡略に各教会の歴史を追ってきたが，ここで幾つかの特徴を整理しながら，記述を補足することにしたい。

日系キリスト教会の成立にあたっては，各宗派の国内伝道母体が主導的な役割を果した点にまず注目する必要がある。それらのミッションが日本人教会を精神的にも経済的にも支えていたのである。日本人に対するこうした動きはサンフランシスコで開始され，内陸部のサクラメントにも波及した。当時のキリスト教は教義の宣教ばかりでなく，むしろ日本人に対する各種の便宜の提供や世話どりのような援助的側面を強く押しだしていた。就職の斡旋，英語の教授，社会生活の指導，禁酒運動などは，キリスト教が特に力を入れた点である。サクラメントでは既述の教会に加え，救世軍が1920年に日本人小隊を設置し，そうした面での活動を日米開戦に至るまで継続していた[9]。逆にいえばアメリカ社会への適応・融合などを指向する人々にとって，キリスト教はアメリカの文化を代表するものと映ったといっても過言ではないだろう。またキリスト教が，さまざまに現れる白人による日系人の差別や排斥に対抗し，緩衝的役

9) 戦後は本部の方針で日系部の再開を許さなかった［北加基督教々会同盟　1957: 41–42］。

割を演じた点も見逃すわけにはいかない。

こうして成立した日系キリスト教会は，当初より宗派色はあまり強くなかった。もちろんサクラメントでも長老教会から浸礼教会へ牧師が移るなど，組織上・教義上の対立も皆無ではなかった。また合同に失敗した例もある。しかし，異宗派の牧師に就任を依頼したり，合同で集会を開催するなど，日系人としての連帯がかなり強く存在してきたように思われる。

つぎに日系キリスト教会の展開におけるいくつかの重要な変化にも注目しておく必要がある。その一つは自立教会への歩みである。すなわちミッションの経済的援助からの自立である。戦前それを果たした教会もあるが，1950年代に至って文字通り独立した教会もある。それと平行して合同の動きもみられた。後述するように異宗派間の合同には成功しなかったが，その一歩手前にまではいっていた。それから世代交替にともなう変化がある。それは単に日本語から英語へという変化にとどまらず，意識の上でも大きく変っている。この点については，第Ⅱ部にゆずる。ただ民族教会としての性格は迂余曲折を経たが，多くの教会において今日まで堅持されている点は注目される。ただしその場合には，再認識された民族教会という面が決定的に異なっている。

日系人の歴史において日米の戦争を無視することはできない。転住所における強制収容は日系人の生活に多大の変化を及ぼし，戦後の教会活動もゼロから始まったが，歴史の流れとしては戦前の延長にあったように思われる。戦後の教会再建の核となったのは戦前からの中心メンバーが多かった。ちなみに戦前の1936年の教会員の名簿

表1　サクラメントのキリスト教徒 (1936)

類別 / 教会名	一世	二世	不明	計	日曜学校生徒
サクラメント美以教会	41	9	12	62	130
フローリン美以教会	85	115	7	207	150
サクラメント基督教会	50	54	0	104	151
第一日本人浸礼教会	32	31	3	66	130
メイユー伝道館	14	17	0	31	64

表2　パークビュー長老教会の教会員構成 (1979. 12. 31現在)

受洗教会員	夫婦	30組
	独身者・大学生	40人
	夫のみ	17人
	妻のみ	23人
	未成年	16人
	計	156人
求道者(未受洗者)		14世帯

*教会出席者の平均 (1980)

英語使用者	45. 8(人)
日本語使用者	6. 0
日曜学校	25. 0
計	76. 8

*1981 Parkview Annual Report によって作成。

([藤賀　1936]) をもとに調査した結果の一部を，世代別の一覧として掲げておく (表1)。さらに，参考のために，パークビュー長老教会の最近の教会員構成及び礼拝出席者の一覧表を添える（表2)。

Ⅱ．日系キリスト教徒の意識

第Ⅱ部では日系キリスト教徒の意識を問題に据えるが，いわゆる意識調査というような統計的方法を採用せず，面接と観察に多くを依存している。しかし，一部では文献資料も援用している。まず入信動機を検討し，ついで宗教意識と民族意識について論ずる。

1. 入信動機

キリスト教への改宗は，原理的には日本での宗教生活からの脱皮を意味していた。移民の大多数は農村の出身者であって，都会の者は相対的に少なかった。したがって農村における宗教生活が，いうなれば多くの移民の引きずってきた宗教的伝統であった。仏教がその伝統をほとんど無意識的に継続させたものであるとするならば，キリスト教への入信はその伝統からの離脱をはかるものであった。とはいえこのような割り切り方も危険ではある。なぜならキリスト教への改宗にもさまざまな動機が存在したのであり，回心を伴なわない場合も少なくなかったからである。ここでは一世と二世を中心にインタビューの結果をまとめてみた。一世が14人，二世が5人である。

1)　一世の場合

大人で渡米した一世と子供のとき呼び寄せで渡米した一世とではやや意識が異なる。後者は一世とはいえ二世に近い立場にあるからである。前者は12人で，後者は2人である。14人の一世のうちで日本でキリスト教徒だった者はいない。皆アメリカでキリスト教に入信した者ばかりであり，それなりの入信動機をもっている。現在の所属教会の内訳はUMC 4名，PPC 4名，JBC 2名，MBC 3名，SDA 1名である。男女別では男6名，女8名である。またすべて戦前の渡航者である。

宗教を比較検討しある程度研究して改宗した例は，SDAの男性ただ一例である。彼は1912年父の呼び寄せで渡米した。家は西本願寺系だったので，戦前は仏教会の役員をしたこともあるという。彼は20年間も医者通いをするような不運に苦しみ，宗教とくに生長の家には7年間もかかわって研究したという。そして1938年，SDAの教えに確信をもち，サクラメントの日本人では初めて洗礼を受けるに至った。彼の改宗に対し母は，

仏教に生まれながらキリスト教に改宗したといって怒ったという。もっとも宗教を比較研究しないまでも，キリスト教についてかなり学んで後に改宗した例はある。サンフランシスコの日本人キリスト教会で土曜日の晩に開かれていた講演会に欠かさず通った人の場合などはそうである。しかし多くの場合は，キリスト教の教義とか教えの優秀性を確信したからではなく，アメリカという社会に身を置いたことに起因していた。

まずアメリカはキリスト教の国だからキリスト教徒になるのが当然だという意識が存在したことである。仏教会の青年会でこのような主張をして摩擦をおこした人はやや極端な例としても，アメリカで生活するのだから宗教もキリスト教で，と漠然と考える人は少なくなかった。一世といえども比較的若い年代が多かったから，日本の宗教的伝統に強く束縛されてはいなかったし，アメリカでの生活に憧憬を抱く人々も少なくなかった。だからキリスト教徒になりたいという希望を抱いて教会に通った人もいる。こうした一般的背景を前提としてキリスト教への求道がなされたが，当初の動機は多様であった。

たとえば，牧師家族の提供する日本食によばれるから教会に集まったとか，白人教会に出席し茶とクッキーで歓待されたのに感激したとかである。一見つまらない話のようであるが，当時の日本人のおかれていた立場を考慮する必要がある。日本人は固まって生活していたが，それでも日本食をいつでも食べられるような状況にはなかった。また日本人に対する差別の厳しかった時期であって，白人に歓待されるのは感激以外の何物でもなかったのである。フローリンのメソヂスト教会が日本人に対する差別を少しでも緩和させるために設立されたことは，すでに記したところでもある。

教会に英語を習いに行っているうちに改宗を決意するに至った例はかなり多い。そうした一世は向学心もさりながら，アメリカ社会での生活に賭けていたところがあった。もっとも，それほど切実ではなく，他に行くところもなく自然に教会に足が向いたというひともいる。白人の牧師や宣教師の人柄にうたれたひともあったようだ。こうした改宗の過程を通るひとは男性に顕著だった。

他方，女性の場合は，本人というよりも二世の子供を介して教会と結びつくことが意外に多かった。つまり子供を教会の日曜学校に通わせているうちに自分も婦人会などで活発に活動したり，またクリスマスやイースターあるいは牧師の歓迎会や送別会などの機会に次第に教会と結びつくという過程をたどった。実際，子供をキリスト教の雰囲気で育てたいと願った母親は多かった。たとえばキリスト教の教義は知らなくとも，酒・タバコを禁止するだけでも子供の教育にはいいと思い入信した例がある。子供だけ行かせるわけにいかないので自分も行くようになったというひともいる。あ

るいは教会には行かなかったが，子供を日曜学校にずっと送っていたので，家庭集会はよく開いたという主婦がいる。もちろん子供の縁ばかりで教会に繋がっていたわけではない。教会のメンバーすなわち受洗した正規の教会員でなくても，婦人会には入会できたところでは，婦人同士の繋がりが重要だった。こうした社会的な繋がりばかりでなく，教えに共鳴した点も注意しなければならない。たとえば，「女性は弱いものだから大切にしなければいけない」との教えは，仏教会とまったく異なり，興味をそそられたというひとがいる。牧師の態度や行ないに感銘した場合もある。たとえば，日本人の牧師に手をにぎられてはじめて人間らしい扱いを受けたとし，そうした扱いをしてくれるので仏教よりもキリスト教のほうへなびいたというひとがいた。

戦前に渡米しても戦後に入信したというひとは，やや動機を異にしていた。たとえば息子の嫁の父親が短気で喧嘩が早く，クリスチャンになって神に助けてもらわなければ仲良くなれないと思い受洗したという例がある。子供が介在してはいるが，柔和な心構えを求めてのことであった。

キリスト教における改宗の典型は，異教の神の祭祀をやめ，罪を悔い改めて回心するものであるとすれば，日本人一世の場合はその典型からはかなりはずれていた。まず祀るべき神や仏を持たない者が多かった。つまりやめるべき祭祀はほとんどなかったのである。だから強烈に意識して日本の宗教的伝統から離脱したわけではないのである。また罪の意識も薄かった。というより原罪の何たるかを知らない場合が多かったであろう。以上わずかな事例ではあるが，日本人一世の場合の改宗は，アメリカでの生活を安全に確保するための有力な戦略としての面が強かった。差別に対する打開策，二世教育，新しいライフ・スタイルの摂取など，キリスト教ならではの積極的な適応・融合の側面を認めることができる。

2)　二世の場合

二世の所属教会別内訳は UMC 1名，PPC 3名，JBC 1名である。それに一世ではあっても二世と同じような扱いができる者が1名である。

二世の場合，日本の宗教的伝統との訣別という面はほとんどなく，親の影響下か友人との関係でキリスト教教会との関わりをもつことが一般的であった。その場合でも所属教会による差はほとんどみられない。先にも述べたように，一世の親が二世を日曜学校に通わせたのである。逆に，子供のほうが友人との関係で教会活動に加わった例もある。そうした場合，仏教会でも日曜学校は開かれていたのであるが，親は仏教会でも子供はキリスト教の日曜学校に通うこともあった。これは子供に親の宗教を強要しなかった例である。日曜学校だけでなく親が教会のボーイ・スカウト活動に熱心

で，それにはいっていた二世もいる。教会では仏教会とキリスト教教会をとわずスポーツ活動が活発で，多くの二世が日本人教会間の対抗試合を行なっていた。子供にとって教会の活動ばかりが入信の機縁ではなかった。日曜学校のあと教会員宅の水泳プールに泳ぎに行き，プールで遊んでいるうちにいつのまにかクリスチャンになったという話もあるくらいである。受洗については，一世の父母の受洗よりも子供のほうが先行する場合も少なくなかった。なぜなら一世には受洗に踏みきるまでにさまざまな障害があったのである。もちろん，親子同時に洗礼を受けた場合も少なくなかった。

三世の場合は二世のそれと大同小異である。一般的には，キリスト教教会の日曜学校で育ち，長じて受洗するという過程である。ただし，幼児洗礼をする教会もある。もっとも高校生位になるとほとんど日曜学校には通わなくなるそうである。

2. 宗教意識

1) 社会生活における宗教意識

社会生活といっても広く漠然としているので，ここでは白人社会との関係，日系人社会との関係，ならびに仏教との関係に絞って整理してみたい。そうした関係のなかでキリスト教徒の宗教意識がどう発現するかが問題となる。

まず白人社会との関係であるが，キリスト教徒のなかに，キリスト教の影響関係がなかったら，日本人は白人の社会に受けいれてもらえなかったという意識がある。これはたいへん重要な点である。図式的にいえば，白人社会と日本人社会の仲介者的役割を果たしたというのである。だからこそ当の日本人社会からはキリスト教徒はスパイよばわりされたこともあった。とくに収容所においてそれがはなはだしく，暴行事件にまで発展したこともある。フローリンのキリスト教会の設立が，白人社会に受けいれられるための，ひとつの方途として計画されたことは，この間の事情を如実に物語っている。

日系人社会との関係については，積極派と消極派とにわかれる。積極派はPPCとUMCであり，消極派はJBCとMBCとSDAである。たとえば5月30日のメモリアル・デイの日，サクラメントの市営墓地にある先亡者慰霊塔の前で，諸宗教の合同参加による式典が毎年行なわれる。メモリアル・デイ自体は戦死者の追憶を目的とする国の祝日であるが，日系人にとっては，欧州戦線でアメリカへの忠誠の証しをたてて亡くなった二世戦士ともども，先亡者を追悼する日になっている。PPCとUMCの牧師は毎年交代で参加するが，残りの3教会は参加しない。以前はJBCの牧師も加わっていたが，バプテストは一般に社会的な行事にはかかわらないうえに，牧師が臨



写真 6

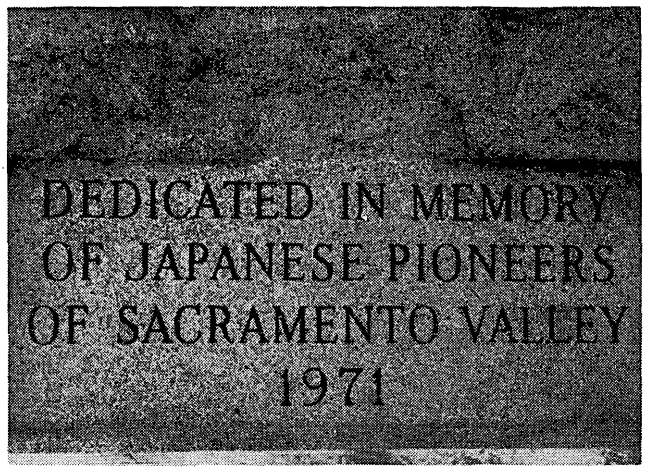


写真 7

写真 6　サクラメント市営墓地の先亡者慰霊塔
写真 7　先亡者慰霊塔の碑文

時だったり白人だったりという事情もあろう。SDA は他のキリスト教教会との関係すらなく，日系人社会との関係もほとんど皆無である。さて，行事の実状は次の通りである。たとえば PPC の場合，牧師の外に20数名の一世と付添の二世がついていく程度である。なおその式典の後，キリスト教関係者だけの墓まいりがある。墓地は East Lawn と Sacramento Memorial が隔年交代となる。短い礼拝の後，一世の墓を中心にまわる。その時，「あんたも苦労したねえ」とか「もう楽になったねえ」とか，語りかけるという。墓まいりがすんでから食事を一緒にとるが，これが一世にとっては楽しみでもある。

日系人のかかえる問題を教会で報告・討議したりするのも積極派である。たとえば強制収容の賠償請求の問題である。こうした問題に PPC は熱心だが，UMC は社会問題には深く関与しない。しかし両教会とも，年配の日系人を対象とする「楽しみ会」では，ソーシャル・ワーカーや仏教の開教使とともに牧師が積極的な役割を演じてきた。これは毎週金曜日，2会場に分かれて昼食を提供し，映画やビンゴや歌などを楽しむ会である。北サクラメントでは仏教会，南サクラメントでは UMC のホールを会場としている。北サクラメントでは PPC の牧師と仏教会の開教使が隔週交代で司会をつとめている。

ところでサクラメントには JACL (Japanese American Citizens League) など日系人会の主催する祭りはない。ただしバザーは資金集めの催しだが，それにかわるよ

うな性格を備えている。たとえば仏教会のバザーは文化行事も盛りこみ，さながら「日系人社会の祭り」といった風情である[10]。UMC や PPC ではテリヤキ・チキンや寿司などのフード・バザーだけだが，こうしたバザーには宗教や教会の違いを問わず多くの日系人が集まり，協力する。非日系人もこの時とばかり日本食をめざして多数やってくる。

最後に仏教会とキリスト教会のメンバーの関係であるが，キリスト教徒の側からすると，他の日系人に差別・排斥されたという意識をもっている。これは日系人のマイノリティであるというキリスト教徒の意識と無関係ではない。キリスト教徒は一般にアメリカ指向が強いから，スパイよばわりされないまでも，日本の伝統を守ろうとする人々からは反感をもって遇せられるところがあった。たとえば，「宗教を変える者はろくな者ではない」とか「罪人の集まりだ」というような非難を浴びせかけられたのである。またこちこち頭を意味するブッダ・ヘッドに対しクリヘッドと軽蔑された。とくにフローリンでは仏教会とキリスト教会のメンバーとの間にずいぶん軋轢があったらしい。なおキリスト教徒が仏教徒に比して相対的にアメリカ指向が強いという例のひとつは，県人会の行事にあまり参加しないことにも現われている。

2)　教会生活における宗教意識

教会生活すなわち宗教生活であるとは一概に言えない部分に光を当てて，宗教意識をさぐってみたい。なぜなら教会によって宗教意識に差があり，信者がいつも宗教意識に裏付けられた行動をとっているわけではないからである。

まず PPC では，伝道集会は行なわないでフェローシップを重視している。二世の多数がこの路線を支持しているし，牧師も社交的な活動に力をいれている。聖書研究会や祈禱会は財部牧師の着任後まもなく無くなった。二世の参加が少なくなったからである。彼らは聖書研究をあまり重視しないようである。ただし，一世婦人会では1980年まで月一回聖書研究をしていた。しかしこれも中心的メンバーの死去のために解体した。また，たまたま筆者が出席した日曜礼拝では説教が無く，意外に思った。その時はキャンプでの体験報告がそれに代っていた。もっともこれは例外とのことである。他方，社交的行事は多彩であり，社会的関心も高い。社交的行事には後述の一世感謝日 (Issei Day) とか，家族のキャンプ，夫婦者だけのディナー，クリスマス行事，モチツキなどがある。社会的関心の高さを示す活動には，後述の一世生活史プロジェクトや，アジア系の新移民に対する援助などがある。収容所から西海岸への再移住が許

10) サクラメントも含めた北カリフォルニアの盆行事については栗田論文を参照されたい [栗田 1982: 6–17]。

された時，教会はホステルとして機能したが，それを恩に感じたある一世は当時の牧師のことを神の如く思っている。これは日本的と形容できる宗教意識である。

PPC と対照的なのは JBC と SDA である。これらの教会ではフェローシップもさりながら，聖書研究や教義の学習，また祈禱に重きをおいている。ここでは日曜礼拝に病気の人々に対する祈禱がある。JBC では聖書研究と祈禱会を兼ねた集会が毎週1回続けられていたし，MBC でも聖書研究会は週2度開かれていた。毎年あるわけではないが，伝道集会も時々行なわれている。ただし JBC の教勢は現在あまりふるわない。

UMC の特徴をあえて一言でまとめれば，リベラルな PPC とファンダメンタルな JBC との中間に位置しているといえよう。UMC には特別伝道集会が年3回ほどあり，ともしび会の聖書研究がある。ともしび会とはアメリカ軍人に嫁いだ日本人女性のグループである。このほかにも各種の活動があるが，大きな行事は月1回くらいにとどめているという。なお，先述の如く，政治や社会問題とは一線を画している。

3)　家庭生活における宗教意識

家庭生活といってもここでは死者祭祀のみを問題とする。子弟教育については先にふれたし，結婚については後述する。ここではキリスト教の家庭における死者に対する祭祀や意識をさぐるのが目的となる。プロテスタントの場合，死者に対してはふつう無関心な態度をとるはずであるが，アメリカの日本人や日系人の場合には日本的な伝統をある程度ひきずっている。日本のキリスト教徒の場合でも死者祭祀を中心とする家の宗教となる傾向があることは，森岡やリードらの研究によって明らかにされている [森岡　1970; Reid　1981]。

まず葬式であるが，日系人の場合は火葬が圧倒的に多い。キリスト教の復活信仰からすると，土葬が一般的なはずであるが，サクラメントの仏教徒と同様に火葬が9割を越えるという。葬式（告別式）はふつう夕刻に執行される。参列者の勤務の終了を考慮してのことであるが，日系人一般の葬儀と同様に日系人の参列者がたいへん多い。ふつう250～300人も集まるという。ちなみに白人の場合は100人程度であるらしい。また後者が葬儀社中心であるのに対し，日系人の場合は教会が主体となる。香典帳をつける習慣も日系人には引き継がれている。このようにキリスト教徒であるなしを問わず，日系人の場合には日系人同士のつきあいが重きをなしているのである。

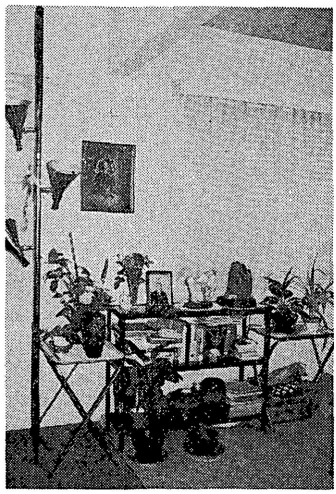
最近の日本でもそうだが，服喪の習慣はほとんどない。日本では年賀状の欠礼程度のことはあるが，アメリカではクリスマス・カードを忌避するという習慣はない。た

だ牧師がカウンセリングのため遺族の家庭を訪問することが，あえて類比するとすれば，これが初7日や49日の法事に相当する。期間も3カ月くらいの間という。仏教の法事のことはメモリアル・サービスと称し，教会や家庭で行なう。教会でのメモリアル・サービスはかなり日本的とみえて，長老教会では祭式規定がなかったので，牧師が自ら創作したという。さて，サクラメントのキリスト教徒は，1周忌のメモリアル・サービスはほとんど欠かさず行なっている。しかし3周忌となると半分位に減少し，7周忌以上だとほとんどしなくなるという。ある一世の未亡人の場合，1年，3年，10年，25年，38年に亡夫のメモリアル・サービスを行なったが，これは多いほうである。特に定まった年の規定はない。この一世によると，日本人は仏教の影響をうけているからするのであって，2・3世はほとんどしないという。これは親戚を集めてするようなメモリアル・サービスであり，終了後はレストランで食事を共にするのが一般的である。もっとも以前は自宅でつくった料理を教会に持っていったらしい。なお，より私的な追悼は毎年行なっている。命日の近くの日曜日に近親者が日曜礼拝に出席し，献金を捧げて追悼の意を表わす。この時献花も行なわれ，礼拝壇を飾る。教会によっては重複を避けるために献花の年間スケジュールを決めているところもある。

墓まいりはキリスト教徒もけっこう頻繁に行なっている。興味深いことに，墓まいりは仏教的影響とは考えず，日本人の守るべき伝統ないし習慣とみなしている。一般的な傾向としては，一世が最も熱心であって，二世から三世になるにつれて無関心の度は高くなっていくようだ。墓まいりの度合は親密度によるという二世もいた。

キリスト教徒であっても死者祭祀に関して仏教会と繋がっている場合がある。たとえば夫が亡くなった時，キリスト教の所属教会で葬式をしようと計画したら，二世の娘が「本人の生まれた宗教でやるべきだ」と主張し，仏教会でやったという例がある。この人の場合では法事をする時だけ仏教会にも行っている。また父母の遺骨が日本にあり，お盆には送金しているというキリスト教徒もいる。またキリスト教徒でも仏教会に責務を感じるという二世もいる。なぜなら，一世の親が仏教会に世話になっていたからである。

最後に家庭における崇拝対象を問題にしてみたい。崇拝対象といっても飾りに近いものもある。亡くなった近親者の写真とともに祭壇らしきものを設ける家庭がある。ある未亡人の家ではリビングの一角に十字架やキリスト像を並べ，そのもとに夫の写真を置き，花で飾るとともに，キリスト教関係の本をそこに並べていた。またある未亡人の家では，墓まいりができないので，仕方なく写真を暖炉の上に祀っていた。そこには花が供えられていた。またキリスト像の絵画パネルを食事室の壁に飾っている



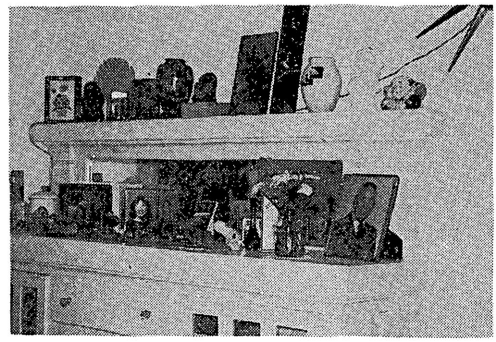


写真 8　亡夫の写真と供花

家庭もあった。キリスト教徒であっても，亡くなった近親者の名前を書いたペーパー（位牌？）を大切にもっているというひともいた。

4)　個人と宗教意識

一般に，アメリカでは宗教は個人の信仰と深くかかわっているといわれている。しかし以上みてきたように，社会的な要素も少なくない。個人の純粋な領域などは無きに等しいのである。しかし，私的な事柄として宗教を考える面もあり，この点とくにキリスト教の場合には考慮に値する。

一般的に他人の宗教には不干渉であることが，アメリカではひとつの原則である。外国への宣教や国内の伝道に熱心であるのとは裏腹に，宗教と政治の話題がタブーとされることは意外に多い。

夫婦で別々の宗教を信奉するとき，個人的な問題として割り切る場合がある。夫がキリスト教徒であって妻がそれに従ったような場合には，日本の宗教的伝統がいろいろな形で残る。夫に従がって改宗したある未亡人は，子供の頃，膝にだかれてお経を聞いたことがなつかしく，キリスト教の祈禱に抵抗を感じると述懐していた。

一世は熱心な信仰をもっていたが，二世・三世になると高校の頃から教会から離れるという。もちろんこれは親からの独立，教会のみが活動の場ではなくなっている状況などがあって一概には言えないが，改宗の意識のある人と，子供の頃からキリスト教的な雰囲気で育った人との差は大きい。たとえば，日本への一時帰国に際し，心変わりしてはいけないと思って，洗礼を決意したという一世もいるほどだ。三世にとって教会は多くの活動の一つにすぎないという見方だけでは，あまり説得的ではない。

キリスト教徒としての意識からすると，ややとまどう日本的な宗教的伝統がある。たとえば焼香である。ひとによって異なるが，焼香はするが手は合わせないという者や，清め purification として割り切るひともいる。仏壇や神棚，あるいは位牌などの扱いもそのひとつである。

また禁欲的なキリスト教徒は，ギャンブル・酒・煙草には厳しく反対するが，いわゆるリベラルな教会ではこれらについてうるさくいわない。一世の全盛時代，すなわち西部開拓の余韻が残る時代とは，ギャンブルや酒に対する歴史的状況が基本的に異なっていると理解したい。

3. 民族意識

ここでは日系人キリスト教徒の民族意識ないし民族としてのアイデンティティについて問題にする。まず民族教会としてのキリスト教会をとりあげ，教会に固有の民族性の問題を考察したい。つぎに民族的な活動に対するキリスト教界のかかわりについて検討したい。そして最後に結婚と民族性の問題について多少ふれる。ここでいう民族性の問題とは，日系アメリカ人にとって不可避の葛藤，すなわち日本人の子孫であることとアメリカの国民であることの，時に二律背反的な性格にまつわる葛藤である。D. オキモトのいう＜二重のアイデンティティ＞である [Okimoto 1970]。その背景としては日系人が白人によって差別されたということが重要である。たとえばフローリンでは1923～59年まで，小学校での人種的隔離が行なわれていた。キリスト教徒はアイデンティティとの関連でいえば，アメリカに同化しようとしたグループにふつう属する。彼らのなかにはアメリカの社会や文化に適応するために，日本の伝統を意識的に隠そうとした人々も少なくない。それゆえ日系人社会のなかでも対立があり，たとえばフローリンには仏教系とキリスト教系の2つの日本人会が存在していたのである。こうした軋轢にもかかわらず，日系人は日系人社会を重要視している。これは少数民族としての宿命でもあろう。

1) 民族教会としてのキリスト教会

サクラメントの日系キリスト教会は，もともと日本人のために設立されたものであり，ミッションからの援助はうけたものの，日本人が中心となって運営してきた。したがって当初から民族教会であったとみなすことができる。しかし戦後はいろいろな事情からさまざまな迂余曲折を経て，MBC を除き民族教会としての方向を採用している。まずはそうした動向を追ってみよう。

戦後の最初の動きは，同宗派内における日系教会の白人教会への吸収であった。長

老教会では本部の方針として白人教会への統合が指示されたが，実際には前に少しふれたように，白人教会の信徒の反対で実現しなかった。白人教会の牧師は本部の方針に賛同してそれを教会ではかったところ，ある信徒が「おまえが出るか私がでるか」と牧師に決断を迫ったという話が伝わっている。またフローリンでは白人のメソヂスト教会がフローリンの日本人メソヂスト教会との合併を画策したが，二世は収容所での隔離経験があったために，その申し出を拒否したという。当時の日本人牧師は白人教会との合併に賛成し，合併に尽力した日系人もいたが，成功しなかった。その時一世の多くは合併に同意したが，二世の信徒は失敗例を指摘したり，同じ合併ならサクラメントの日系メソヂスト教会とのそれを主張して譲らなかったという。そしてその時は，結局どちらとも合同しなかったのである。

異宗派間の合同も企てられた。サクラメントでは長老教会とメソヂスト教会が日本人の超宗派的な教会を設立しようとし，信徒も熱心に動いたけれども，メソヂストのほうの組織形態に問題があって，本部の許可がおりなかったという。そして結局，長老教会は民族教会の道を選択し，メソヂストはサクラメントとフローリンの日系メソヂスト教会同士で合同した。

多民族教会に移行したのはMBCである。MBCは白人の牧師が長くつとめている関係もあって，白人会員が2割5分程存在する。牧師によると民族的教会からコミュニティ・チャーチという多民族教会への移行に伴う緊張は特になく，あえていえば他の日系教会などとの関係の強さが問題だという。ここでは人種平等，民族をこえる接触，キリスト教徒としての連帯が強調されている。それでも，信徒の側には，増加する黒人の加入に対するとまどいは隠しきれない。以前は日曜学校に白人の子供がきても日系人の子供はどう対処していいかわからなかったというが，今はそれが対黒人との関係にややみられる。もちろん決して深刻な事態ではない。ただ Scudder Hall に対して Crone Hall や Issei Hall が存在するような，ある種のバランス感覚は必要なのであろう。

JBCは白人の牧師がこれまた長くつとめてきたが，合併や解散の話題もなく，ずっと民族教会として機能している。ただし，教会名の Japanese を変更すべきだとの意見もあったというが，一世が反対したのでそのままになっているらしい。古い二世も Japanese の必要性を認めるが，若いひとはこだわっていない。一世がいなくなると，教会名も変わるかもしれないという見解もあった。

非日系人のメンバーは当然MBCが一番多いが，他の教会にも少しは存在する。しかしその数はどの教会も数名程度である。PPCでは主に二世を対象にした説教や活

動をするので，白人は準会員 affiliated member 以上にはならないという。SDA は日系人が中心であるが，民族教会を設立するまでは韓国系の人々が多かった。現在でも中国人は若干名いる。白人は門を叩くけれども長続きはしないらしい。

日系人でも白人教会のメンバーになっているひともいる。その数を正確につかむことはできないが，サクラメントでは決して多くはない。意外だったのは，JBC の三世の臨時牧師が，両親は日系人教会に所属しているにもかかわらず，白人教会のメンバーだったことである。また白人教会のメンバーになっている日系人に対し，やや屈折した意識もみられた。たとえば，白人教会の日系人メンバーの葬式には白人はあまり来ない，というような非難めいた発言である。

民族教会の心理的利点は気安さ・気楽さ comfortableness にあるようだ。教会は日系人のみが集まる数少ない場所であり，家に帰った時のように安心できるというのである。日本的な文化，教養，生活様式などを共有し，自尊心や安心感なども確保できるという。また民族教会は外のコミュニティから移ってくる日系人にとっても何かと都合がよい。意見の相違によって他の教会に移った日系人でも，特別の機会には戻ってくるという心理的なつながりがみられる。

さて，教会の行事できわめて民族的な性格の強いものがある。宗教意識の項でとりあげたメモリアル・サービスや墓まいりもそうであるが，ここではそれ以外の行事をとりあげることにしたい。

PPC には民族的とみなされる行事が顕著にみられるので，それを中心に整理してみたい。まず感謝祭の行事である。感謝祭は11月の最後の木曜日に，家庭を中心になされる。これはよく知られているように，ピルグリム・ファーザーズがニュー・イングランドの地で最初に迎えた収穫期に，七面鳥を料理して祝ったことに端を発する国家的行事である。PPC の感謝祭は，財部牧師の発案で1970年頃から始まった。その意図は，ピルグリム・ファーザーズを日本からの一世にみたてて，一世の苦労に感謝するものである。夕食か昼食を共にするのだが，説教や祈禱も伴っている。一世にしろ二世にしろメイフラワー号やピルグリム・ファーザーズに対するアイデンティティは稀薄であり，二世や三世は日系アメリカ人の基礎を築いた一世に対する感謝の気持を強くもっている。

感謝祭よりもより直接的に一世に対する感謝を表わす日がある。一世感謝日曜日 (Issei Day, Issei Appreciation Sunday) がそれである。これも財部牧師の発案で1970年頃から始まったが，当初は感謝祭にしていた。年一回の行事で，1981年度は4月26日に午餐会をもった。もっとも，一世は一世の慰安日と思っていたが，1980年ま

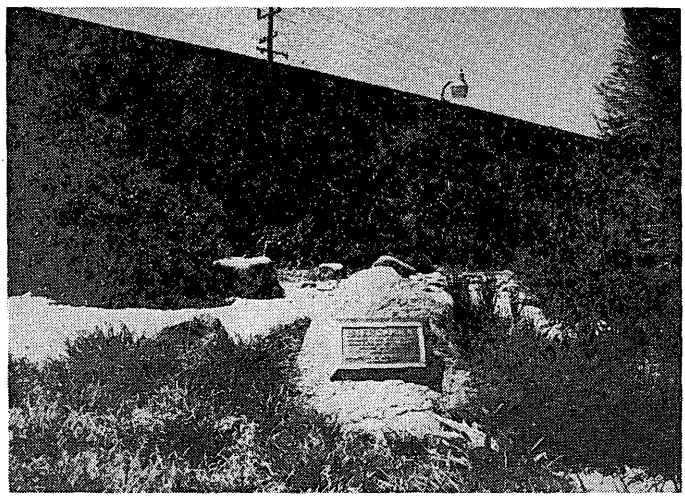


写真 9　合同メソヂスト教会の一世庭園

では自ら御馳走を作らなければならず，動くのがつらくなったので断わったところ，1981年から二世が代って作るようになったという。

このような一世に対する感謝の日は，PPC に限らず，ひろくみられる。UMC では名前も日も決っていないが，一年に2～3回一世を招待することがあるという。その内容は，ポットラックという持ちよりの食事をして，讃美歌を歌ったりするらしい。ロサンゼルス近郊のガーデナのバプテスト教会にも一世感謝日があって，そこでも礼拝の後，ポットラックの昼食と歌や踊りがあるという。ちなみに，JACL には一世感謝日があり，サンフランシスコの Japanese Community Youth Club には二世感謝日すらあるという。

集会や行事のほかにもいろいろな活動がある。たとえば PPC の一世生活史プロジェクトである。これまた財部牧師の発案によって1969年から始まった活動であるが，インタビュー方式で一世の話を聞き，テープを保管するとともに，その刊行にも力を入れている。『Issei Christians』の発行（1977）に続き，『Portrait of a Pioneer』が近刊の予定である。これは1975年，非営利団体となった。

UMC には一世庭園 (Issei Garden) と称する日本的庭園がある。一世の2～3人の者が二世の協力を得て造成したというが，そこには次のように刻まれている。

Dedicated to our issei pioneers whose faith and devotion made possible this church　April 1972

（訳：この教会の設立を可能ならしめた信仰と献身の持ち主であるわれらの一世に捧げる　1972年4月）

SDA にも日本的庭園はあり，MBC には一世ホールがある。

2)　日系キリスト教界の民族的活動

民族教会としてのキリスト教会が合同で集会をする機会がある。これは，同宗派と異宗派の場合にわけられる。前者には長老教会だけの年会 (Japanese Presbytery Conference) があり，2月に3日間行なわれる。後者ではまず Sacramento-Stockton Japanese American Christian Fellowship がある。これには春と秋の集会があり，およそ250人位集まり，特別講師を招待する。春の四旬節の時には，3日間連続で夕拝をする。最終日は晩餐会で親睦をはかる。また北加キリスト教連盟 (Northern California Japanese Christian Church Federation) 主催のエキュメニカルな集会が1月にある。ただしSDA は Sacramento-Stockton JACF にも北加キリスト教連盟にも加わっていない。さらにいわゆるファンダメンタルな教会を中心に JEMS (Japanese Evangelical Missionary Society) が組織されていて，サクラメントではバプテストの JBC と MBC が熱心である。とくにマウント・ハーモンの夏期修養会が最大の活動である。これは大人から子供のすべてを含むが，1981年には800人の青少年が集まったという。10年程前には100人程度しか参加しなかったようだが，ある種の信仰復興が若者の間に起って，これ程の盛況をみるに至ったという。ここで「1年間の仕込み」をするという一世もいた。

信徒ばかりでなく牧師にも合同の集会がある。たとえばプレスビテリアンの Japanese Presbyterian Ministers Cultural Seminar であり，年1回，1週間にわたって牧師研修会が開かれる。

最後に，日系人に限らず，アジア系アメリカ人との連帯についてふれておきたい。サクラメントでは日系人が少ないので他のアジア人と協力する必要がある。これには資金援助を引きだすための便宜的な要素が無きにしもあらずであるが，60年代後半からのブラック・パワー運動に影響された面が強い。その頃からとくに三世の間に日系アメリカ人としての意識が強くなった。逆に戦後から1950年代にかけては日本人教会の民族的性格を主張したくなかった時代である。ちなみにそうした活動や行事をあげれば，つぎのようなものがある。まず同宗派内の会では，Asian Presbyterian Conference があり，ふつうサンフランシスコで3～4日にわたってあるが，1981年は1週間だった。またアメリカ軍人と結婚したアジア系女性に対するカウンセリング (Crisis Counseling for Asian-Born Wives of U. S. Serviceman) については，韓国系の長老教会と協力してやっている。また，楽しみ会に相当するアジア系の老人に対する奉仕活動も盛んである。スポーツ活動としては，ソフトボール，テニス，あるいはバス

ケットやボーリングなどのアジア・リーグがあるという。

3)　結婚と民族性

最後に結婚に関して民族性がどう現れるかを検討したい。モンテロの研究によると，一般的に日系人と非日系人との結婚の比率は，一世が1%，二世が10%，三世が40%である [Montero 1980: 65]。性別，年令別，職業別，教育別の内訳にも多少の差異は認められるが，趨勢は上記の如きである。サクラメントでは約10のキリスト教の家系を調べたが，本稿では統計的な処理はせずに，いくつかの傾向と興味深い点の指摘にとどめたい。

結婚の趨勢としてはやはり世代が新しくなるにつれ非日系人との婚姻が増加する。しかしそれに対する親の反対も時々みられる。黒人とだけは結婚すべきでないと考える日系人は少なくないが，相手が白人の場合でも二世などは時に強く反対する。白人と結婚して離婚に終る例もいくつかみられた。親の反対を押しきって結婚する場合，サクラメントあたりではカジノで有名なネバダ州のリノに行って挙式することが多いようだ。

キリスト教徒はキリスト教徒同志での結婚が望ましいと考えているが，キリスト教の家系においても実際は仏教系の相手と結ばれることも少なくない。キリスト教徒は仏教系に比して少数であるという点も影響している。そうした場合，キリスト教の教会活動には不活発になる傾向がある。もっとも宗教を個人の問題と割り切るひともいるが，子弟の宗教教育では緊張を強いられている。

結婚式はふつう新婦の意向が尊重されるというが，実際はまちまちである。あるキリスト教の二世は新婦の両親に対する尊敬から仏教会で式をあげたという。しかし，新婦が仏教系でもキリスト教会でのキリスト教式に固執した例も少なくない。親同士の宗教的妥協がつかず，リノで結婚した例もある。なお，教会での結婚式においては事前に牧師によるカウンセリングが行なわれている。

おわりに

サクラメントのキリスト教会を例に，前半では主に教会の側からの歴史を，後半では信者の側からの意識を探ってきたが，まだ十分論じきれていない点も少なくない。歴史に関しては入手した教会の内部資料をまだ十分に活用しきっていない。意識に関しては三世に関するデータが絶対的に不足している。また仏教会との比較など重要な問題も残っている。本稿ではキリスト教の信仰内容にまでは立ち至っていないが，こ

れも一つの問題には相違ない。ただ，筆者は宗教のオーソドックスな教義よりも現実のありかたに強い関心があるので，信仰体験などはほとんど扱うことができなかった。これらの点はすべて他日を期すことにしたい。

謝　　辞

サクラメントの調査においては，現地の宗教家ならびに信者の方々に多くの暖かい御援助をたまわった。とくにサクラメント合同メソヂスト教会の榊原ジョセフ師，パークビュー長老教会の財部平八郎師，第一日本人浸礼教会の瀬戸マイク師，メイユー・コミュニティ浸礼教会の John Ellis 師，セブンスデー・アドベンチスト教会の瀬分ロイド師の御理解ある協力の賜物と厚く感謝申し上げる。また教会のメンバーの方々の御名前はいちいちあげないが，感謝の気持にかわりはない。

カリフォルニア調査団のメンバーにも感謝を申し上げたい。研究代表者の柳川啓一教授はもとより，井上順孝，栗田靖之，真田孝昭，薗田　稔，星野英紀の諸氏には，調査・討論を通じて啓発され，またお世話になった。スタンフォード大学の別府春海教授，カリフォルニア大学の Robert Bellah 教授には研究会を通じて貴重な御意見を賜わった。併せて深謝申し上げる。

文　　献

Befu, Harumi
1965 Contrastive Acculuturation of California Japanese: Comparative Approach to the Study of Immigrants. *Human Organization* 24(3): 209–216.

北加基督教々会同盟
1957 『開教八十年史』北加基督教々会同盟。

Kashima, Tetsuden
1977 *Buddhism in America: The Social Organization of an Ethnic Religious Institution.* Greenwood Press.

Koga, Sumio (compiled by)
1977 *A Centenial Legacy: History of the Japanese Christian Mission in North America* 1877–1977. Chicago: Nobart, Inc.

栗田靖之
1982 「カリフォルニアの盆踊り――アメリカ社会と日系人の生きかた――」『季刊民族学』21: 6–17。

Layman, Emma McCloy
1976 *Buddhism in America.* Nelson Hall.

Montero, Darrel
1980 *Japanese Americans: Changing Patterns of Ethnic Affiliation over Three Generations.* Westview Press.

森岡清美
1970 『日本の近代社会とキリスト教』評論社。

中牧弘允
1980 「ハワイにおける日系霊能者と民間信仰――オアフ島の女性霊能者の事例――」『国立民族学博物館研究報告』5(2): 317–375。

Okimoto, Daniel I.
1970 *Americans in Disguise.* John Weatherhill. (1971,『仮面のアメリカ人』山岡清二 訳

サイマル出版。）

Reid, David

1981 Remembering the Dead: Change in Protestant Christian Tradition through Contact with Japanese Cultural Tradition. *Japanese Journal of Religious Studies* 8(1–2): 9–33.

白石　清（編集主任）

1964 『北米宣教八十五周年記念誌 (The Eighty-fifth Aniversary of Protestant Work among Japanese in North America 1877～1962)』南加基督教教会連盟出版部。

Suzuki, Lester E.

1979 *Ministry in the Assembly and Relocation Centers of World War II.* Yarbird Publishing Co.

藤賀與一

1936 『北加基督教会便覧』北加基督教会同盟。